



児童養護施設  
つばさ園  
〒615-8256  
京都市西京区山田  
平尾町51の28  
TEL 075(381)3650  
FAX 075(393)4316

## 発達障害・被虐待・不登校の三つ組

京都市児童福祉センター副院長 門 眞一郎

いつの間にか私の仕事の主な領域は発達障害ということになってしまい、

被虐待を始めとする児童養護の領域からは次第に遠ざかっていきました。しかし、最近、再び児童養護の領域での仕事が舞い込むようになったのです。それというのも、児童養護施設で生活する子どもたちの中に発達障害を持つ子が増えてきたからです。発達障害のゆえに虐待された子どもたちです。いえ、もっと正確に言うと、子どもに発達障害のあることが親にも周囲の人たちにも理解できず、そのためにしつけが行き過ぎて虐待に至ったということ

です。発達障害のある子の親にも発達障害があることがあり、そのために子どもをうまく育てられないという場合もあ

ります。発達障害と被虐待は、児童福祉の比較的新しいトピックです。

国立国会図書館のホームページで雑誌記事索引の検索ができることをご存知でしょうか。複写サービスもあります。この検索サービスを使って、「虐待」と「発達障害」を組み合わせて検索してみました。この二つの語が我が国の学術雑誌記事の題名に初めて登場したのは、一九九九年のことです。国会図書館に所蔵されている雑誌の中では、この年には一篇だけ見つかりました。しかし、翌二〇〇〇年には見当たらず、二十一世紀になって二〇〇一年から二〇〇四年までは年に一篇か二篇で推移し、二〇〇五年から急増しています。二〇〇七年には三六篇にも膨れ上がっています。

最初に登場した一九九九年の論稿は、「発達障害と虐待―情緒障害児短期治療施設でのケア」という題名で、『世界の児童と母性』という雑誌の一九九九年一〇月号に掲載されています。実はこれ、何を隠そう私が書いたものです。かつて京都市児童福祉センター内の情緒障害児短期治療施設「青葉寮」で寮長をしていたことがありますが、その頃に入寮してきた一人の小学生在が、注意欠如多動性障害(ADHD)という発達障害を持っており、しかも父親から虐待を受けていました。

当時の医学常識では、虐待を受けると、その結果として注意欠如多動性障害とよく似た状態になることがあると言われていました。落ち着きがなく、じっとしておれず、衝動的な行動をとるといった状態になることがあるというものです。しかし、その頃、私の臨床場面に登場する子どもたちの主な問題は、不登



校から発達障害へと変わりつつありました。そして、発達障害、とくに注意欠如多動性障害や自閉症の幼児が、落ちつきなく衝動的に行動し、コミュニケーションもうまくとれないと言う場合、親のストレスは甚大なものになり、また周囲の人々から「一体どんなしつけをしているんや!」とか「ちゃんとしつけんかい!」などのプレッシャーをかけられると、親はついつい厳しくしつけようとして、いつの間にか虐待の域に踏み込んでしまっても、それはごく当然なことではないかと思うようになりました。

つまり、虐待を受けた結果として注意欠如多動性障害のような状態になる



のではなく、逆に、注意欠如多動性障害があると虐待を招き寄せることがあるということも考えるべきではないか  
 と思ひ、従来の医学常識に一石を投じる意味で、くだんの雑誌に寄稿したのです。しかし、あまり読まれる雑誌ではないのでしよう、何の反響もありませんでした。時期尚早だったのかもしれない。

ところで、「発達障害」と「不登校」というトピックも時期を同じくして注目されるようになりました。この組み合わせも、先の国会図書館の検索サービスを使うと、二〇〇二年の文献が初

出のようです。しかし、こちらの文献の急増傾向は「虐待」よりも急激です。

いまや児童養護施設は、「虐待」「発達障害」「不登校」の三つ組に取り組まなければならない時代となったようです。心理的な問題についての高い専門知識と経験が必要とされる仕事が児童養護施設に押し寄せている感がします。制度的には情緒障害短期治療施設の領分なのでしょうが、とても数が足りません。やむなくそれを支えているのが児童養護施設でしょうが、情緒障害短期治療施設よりも子どもの生活面での自由度が高い分、職員の負担や求められる努力ははるかに大きいことでしょう。職員の皆様の日々のご苦勞を思うと頭が下がります。皆様の無用なご苦勞を減らすためには、力になる知識を身につけることも必要でしょう。その点でも児童福祉センターを今後ますます上手く活用していただきたいと思っています。



## つばさ太鼓

つばさ太鼓は現在、年に三度ほど演奏依頼があり、子ども達がたくさんの方の前で和太鼓を演奏させて頂いております。子ども達にとっては大変貴重な体験になっており、いつもありがたく思っております。

出演が終わった後はいつも、緊張から解放されたからか、達成感を感じているのか、子どもたちの顔は嬉しそうです。「おばあちゃん手叩いてくれたはった」、「赤ちゃん泣かへんかったな」と、話すこともあり、お客さんの反応を子ども達なりに気にしているようです。

つばさ太鼓では、演奏の上手、下手は無関係です。「太鼓やりたい」、その一言で参加できます。そして、参加した子ども全員が本番の舞台上に上がります。太鼓が足りない時には、他のサークルから借りてくることもあります。不思議なもので、本番にリズムがメチャクチャでも、元気良く叩いていると曲は成り立つし、時には、逆にお客さんに喜んでもらえることさえもあります。客席からは見えませんが、リズム

ムが合わない子に  
 向かって、  
 近くにいる  
 子どもも  
 が「口パク」でリズムを合  
 わせようと、助け



てくれることもあります。じっと見つめて、見守っている子もいます。決して上手な演奏というわけではないのにお客さんに喜んでいただけているのは、おそらく、上手に叩けない子も受け入れようとする子どもたちの姿が、客席にも伝わっているのではないかと、感じるのが時折あります。

つばさ太鼓は、「上手やった」と褒められることよりも、「元気がいい!」とか「かっこいい!」と褒めて頂くことの方がよくあります。上手にこしたことはありませんが、これからも、子ども達が元気に楽しく太鼓を叩けるような、そして、聴いて下さる方にも喜んで頂けるような、そんなつばさ太鼓でありたいと願っております。